

## X. 日本教会に期待される「世界宣教」

### 1. 日本からの海外宣教

「国内の伝道が難渋している現状で、どうして海外に働き人を送り出す余力があるか。日本こそが最大の宣教地ではないのか」という現実論を見据えつつではあるが、教会の原点に立った世界宣教への幻と計画を捉えるべきである。日本の社会と教会の閉鎖性打開の鍵は、世界宣教にある。宣教師を送り出すという犠牲を通して私達は世界の教会の一部と強く認識でき、また、報告の為に帰国する宣教師を通して、日本の教会の幻が拡大される。実際、1960年代からインマヌエルは宣教師派遣を始め、それは大きな祝福となっている。インマヌエルの創業者・蔦田二雄師に与えられた幻は「世界宣教」であった」1960年代から、ウエスレアン教会と World Gospel Mission との三者の協力関係においてインド、ジャマイカ、パプア・ニューギニアなどに宣教師を派遣、今日迄続いている。日本教会全体としては、1990年代には300人の宣教師を派遣する様になったが、その後、宣教師の数は拡大していない。

### 2. 私の証と軌跡

1) 私に与えられた召命：伝道職への献身と海外宣教師となる挑戦。宣教師候補としてのインド留学。WGMの招きでケニア・ナクル市の教会開拓を委嘱される。

2) アフリカにおける都市伝道の必要：①都市の膨張：アフリカは基本的に農村社会であるが、第二次大戦後、工業化によって都市化が進行し始め、さらに、都市居住をヨーロッパ人とそれに関係する人々に限っていた規則が独立(1963年)以後撤廃された事に伴って都市人口は急増した。この儘の増加が進むと、2040年にはケニア人口の半数が都市に住む事になる。その理由は、農村における現金収入が非常に限られている事、そして人口が増加している言わば「農村のプッシュ」、教育、行政、商工業活動が都市に集中し、近代文明の魅力もそこに集まっている事(都市のプル)等である。先進諸国の都市化は何世紀もかけて徐々になされたのに比べて、アフリカの都市化はほぼ一世代に起きている。その急速な都市化が齎す歪みは深刻である；②都市化の歪みとしては、インフラ不足(都市に必要な交通、住宅、電気、上下水道等の整備が殆どなされぬ儘、人口だけが増加し、非衛生な住居環境)が大きな問題である；③失業・半失業：仕事を求めて若者が都市に押し寄せるが、雇用状況は絶望的で、若者の約半数が失業・半失業の状態である。大学を出ても職に就けない若者は多い。そのような膨大な人口がスラム化している；④道徳の崩壊：農村では、部族の掟が支配していて、犯罪は少ないが、都市は他民族雑居状況であるから、掟は通用しない。加えて、近代文明の齎す物質的な誘惑に満ちている。それが凶悪な強盗などの犯罪に短絡する；④家庭の崩壊：都市で働く男性は、妻と子供達を農村に残した儘の者が多い。都市で「第二の妻」に走る誘惑も多い。更に、伝統的な家庭の崩壊がストリート・チ

ルドレンを生み出す。その数は数万人と言われ、深刻な問題となっている(市橋宣教師のコイノニア教育センターは、その状況打開を目指している)。



3) 私の奉仕の概要：1979年、ケニア第四の都市ナクルでのAGC開拓伝道。諸部族融合型の教会建設。Lakeview Africa Gospel Churchの進展と、会堂建設。EE (Evangelism Explosion) を用いての近隣伝道。隣接の町村での開拓伝道。その間トリニティ神学校の学びを通して「アフリカにおける都市開拓伝道の方策」を学ぶ。WGMの働きの果であるAGCは特定の部族中心の村落教会であったが、部族融合型の都市教会を目指す様になり、都市教会開拓委員会を作った。私はその中で都市教会開拓計画づくりに参与した。1998年(インマヌエルの内部事情により)帰国する事となったが、今でもケニア宣教への間接的関与を続けている。昨年、市橋宣教師の

コイノニア教育センター開所20周年記念礼拝の為日本人7名のグループで伺い、説教をした。また、ナクルLakeviewAGCにも伺い、良き励ましを頂いた。

### 3. これからの日本教会と海外宣教

JOMA (Japan Overseas Mission Association) 加盟の諸教団、超教派団体は、互いの連絡を取りつつ、日本から海外への宣教師派遣を支援している。この働きが、日本における伝道の祝福となって帰ってくることを期待している。